

まなびと



もくじ

社会科の
苦手な先生
も必見！

特集 日常の社会科授業を見つめ直す

- 日常の社会科授業力を上げる ～社会科教科書の使われ方の実態とその改善 …………… 2
- 日常の社会科授業の活性化が急務 ～教科書とICTを軸にした社会科の可能性 …………… 5

実践紹介

- 問題解決的な学習＝問い→思考→知識 ～農家の仕事の工夫について考える「問い」の実践 …………… 12
- 編集部からのお知らせ…………… 18

日常の社会科授業力を上げる

—社会科教科書の使われ方の実態とその改善

東京学芸大学教授 **大澤 克美** おおさわ かつみ



1 実態調査から見える小学校社会科授業の現実

1 | 社会科授業に見られる二つの学力観

小学校の子どもたちに社会科嫌いが広がっているといわれてから、すでに10年近くが過ぎようとしている。この数年は、小学校において社会科の授業づくりや学習指導に悩む教師が増えているという声、相次いで聞かれるようになってきた。教師のかかえる授業上の問題と、子どもの社会科嫌いとの間に何らかの関連があることは、容易に推察できる。

東京学芸大学・社会科教育学研究室が中心となり、東京都の小学校で実施したアンケートで、「あなたは、自分が行っている社会科の授業の出来具合について、全体としてはどのように感じていますか。」と尋ねたところ、以下のような結果であった。

1. 満足している……………0%
2. まあ満足している……………29%
3. あまり満足していない……………55%
4. 満足していない……………16%

*本小論で示す調査結果は、東京学芸大学の『小学校における社会科授業の実態と教員の意識に関する調査』プロジェクトが、2009～2011年にかけて東京都で実施したアンケート（回収率44.1%）及び聞き取り（14校37名）に基づくものである。なお、グラフについては、回収したアンケートから校長・副校長・非常勤講師を除いた教員300名のデータを利用した。

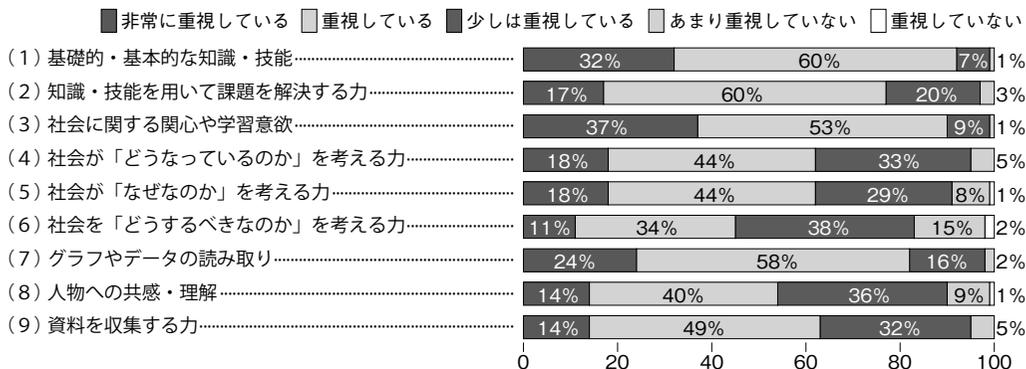
無記名のアンケート調査であっても、自らの授業を厳しく評価して回答した教師が多いと予想されるが、「あまり満足していない」と「満足していない」で71%という結果には、地域的な限定はあっても、教師側の社会科授業に関する問題の深刻さが現れているといえよう。

こうした状況の中で、教師が授業で何を重視しているか、すなわちどのような学力観をもっているかを示したのが、**グラフ1**である。

グラフ1 からすぐにはわかるのは、「基礎的・基本的な知識・技能」「社会に関する関心や学習意欲」「グラフやデータの読み取り」等が重視されているのに比べて、「社会を『どうすべきなのか』を考える力」「人物への共感・理解」「社会が『ど

グラフ1

あなたは、現在担当している学年の社会科の授業を展開する際に、以下の点をどの程度、重視していますか。担当していない場合は、担当しているときのことを想像してお答えください。



うなっているのか』を考える力」「社会が『なぜなのか』を考える力」などがあまり重視されていない現状である。

上記のアンケート結果を、社会科を研究教科とする教師と他の教科・領域を研究教科とする教師という視点からさらに分析したところ、「基礎的・基本的な知識・技能」などの重視に共通性はあるが、前者は後者よりも思考力重視の傾向が強いことが明らかになった。アンケートと並行して実施した教師からの聞き取り調査の結果からも、社会科を研究教科とする教師には、総じて思考力を学力の中核に位置づける傾向が認められ、経験年数の増加に応じて、思考力の具体的な内容や育成の方向性が明確になっていく傾向もうかがわれた。

これに対して、社会科以外の教科・領域を研究教科とする教師には、特に教育内容への興味・関心や、学習への意欲を重視している傾向が認められる。そうした中で経験年数の少ない教師は、グラフ等々の資料を読み取る力を重視していた。また、中堅以上の教師には思考力を意識するという姿も認められるものの、内容の理解に重点をおいている現状がうかがわれた。

2 | 小学校の社会科授業における教科書の利用状況

それでは、授業で主教材とされている教科書は、どのように使われているのであろうか。上記の社

会科を研究教科とする教師と他の教科・領域を研究教科とする教師の学力観の違いに着目し、年齢（経験年数）も考慮してその利用状況を示したのが **グラフ2** である。

二つのグラフを比較すると、以下の傾向が明らかになる。

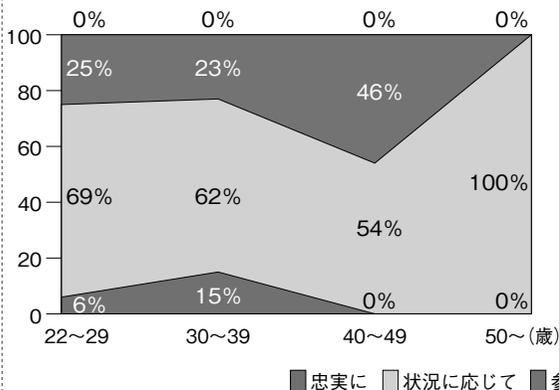
- ①研究教科が社会科である教師は、総じて教科書を状況に応じて、あるいは学習指導の参考に利用している場合が多い。
- ②研究教科が社会科ではない教師は、研究教科が社会科である教師に比べ、総じて教科書を忠実に教えている割合が高く、経験年数が少ない若手ほどその傾向は顕著である。

社会科を研究教科とする教師が、基礎的・基本的な知識・技能の理解や習得等を基盤として思考力の育成を重視し、他の教科・領域を研究教科とする教師が基礎的・基本的な知識・技能の理解や習得、関心・意欲や資料の読み取りを重視しているという傾向から見て、グラフに現れた教科書利用の状況は概ね妥当なものといえるだろう。

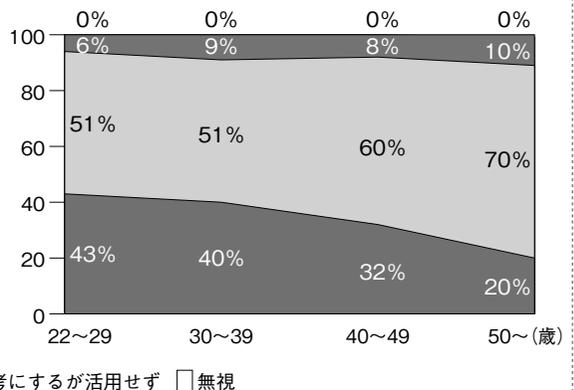
指導書利用については、研究教科によって大きく左右されることがないという調査結果なども踏まえて考察すると、社会科を研究教科とする教師は、教科書単元の目標・内容や展開過程等を考慮しながら、思考力を育成する学習のストーリーを練り上げ、適時必要に応じて教科書の該当ページ

グラフ2

【社会科を研究教科とする教師の教科書利用状況】



【社会科以外を研究教科とする教師の教科書利用状況】



を教材として使用していることが多いようである。これに対して、他の教科・領域を研究教科とする教師は、教職経験と共に多少変化はしていくが、関心や意欲の喚起を意図しつつ、教科書の資料などの内容を忠実に読み取らせ、理解させることが多いと推察される。

2 社会科授業力の育成

1 社会科授業の改善に向けた課題

社会科を研究教科とする、いわゆる社会科の得意な教師は、改めて述べるまでもなく経験年数に応じた自らの課題を意識し、日頃から授業改善に取り組んでいるといえよう。これは、今回実施した調査の中の同僚性（社会科について校内で相談する、社会科研究会への参加など校外での交流がある等）に関する項目の結果などからも明らかになっている。

よって、日常の社会科授業を改善していくにあたっては、社会科以外の教科・領域を研究教科とする教師の社会科への理解と授業力の向上が主要な課題となってくる。今後の継続的な授業改善を期待するなら、特に若手教師の社会科への理解と授業力の向上が鍵となる。

2 教科書や指導書を活用した授業改善

社会科以外の教科・領域を研究教科とする若手教師が、日常的に授業改善を進めていくためには、社会科の学習と指導について典型事例を示す教科書や指導書を一層活用することが期待される。これまで、何を理解・習得させるのか、本時の指導の流れはどうなっているかという面からのみ教科書や指導書を読むことが多かったとすれば、子どもたちに何を考えさせ、どのように表現させるのか、そのために資料等をいかに活用させるかという点により注目して読む習慣を養うのである。

例えば、教科書に、思考力を働かせる話し合いの場面があったら、そこに登場する子どもたちと一

緒に、教師自らそこでの問いに答えてみるようにしたい。教える立場をいったん離れて学ぶ立場に自分を置くことで、紙面に提示されている意見を吟味する体験をしたり、話し合いから新たな疑問をもつ意義を実感したりするのである。自分が意図していた知識の理解や技能の習得が、言葉による暗記ではなく、思考と表現によって生きて働くものとなることを追体験することも必要であろう。

さらに、教科書や指導書を各時間ごとに詳細に読むだけでなく、単元の展開を読み通してどこが学習の山場になるのかを把握するようにすることも大切である。そうした山場は、多くの場合、子どもが自らの経験や既習内容を活かして考え、表現し合う場面になっているはずである。単元目標に子どもたちを導く中心的な学習問題が、そうした山場とどのように結びついているのかを教科書や指導書からつかみ、自らの授業展開に引き寄せて検討することで、相互啓発の場をひらく学習指導が見えてくる。

このような教科書や指導書の読み方・活用の仕方に習熟していくことで、自ずと子どもの反応も予想しやすくなり、教科書の意図的・選択的利用が可能になる。そしてそれは、若手教師が重視する関心と意欲をもって資料を読み取る社会科学学習を実現することにもつながっていくであろう。

3 社会科授業力向上をめざす若手教師へのサポート

若手教師の社会科授業力向上の取り組みにあたっては、周囲にいる社会科を得意とする教師のサポートが不可欠である。例えば、教科書の教材や展開例を、子ども・地域・学校の状況に即して部分的に加工・修正して活用したり、自作の学習ストーリーに即して適時利用したりする指導法を社会科の得意な教師が伝えることは、大きな意味をもつ。学校研究で社会科がほとんど取り上げられなくなった現在、社会科の得意な教師が、若手教師に授業を公開し、教材や発問、板書等について助言したり、相談にのったりすることは、社会科授業の改善にとって必須なことといえよう。

日常の社会科授業の活性化が急務

—教科書とICTを軸にした社会科の可能性—

札幌市立山の手南小学校校長 しんぼ もとやす
新保 元康



1 元気がない社会科を憂う

「最近、社会科の授業研究に元気がない」と感じるのは私だけだろうか？社会科は今、小さな曲がり角に来ているのではないかな。

この小論では、小学校における社会科授業の現実を見つめ小さな問題提起を試みたい。そして、教科書を活用した日常授業の改善へのささやかなトライアルを提示する。もちろん、社会科再興を強く願ってのことである。

筆者は、札幌市で30年に渡り教師人生を歩んできた。担任として社会科を18年間指導してきた。その後、担任外として歩み、教頭、校長の経験は6年間である。

若い頃は、社会科の授業研究会が本当に多かった。札幌市内でも学校ぐるみで社会科専門の研究をしていた学校も数校あった。

全国的にも、筑波大学附属小学校で大活躍されていた有田和正先生をはじめ、多くの社会科授業研究のリーダーがいて、社会科は本当に賑やかであったと思う。誠によき時代であった。

今、全国的に社会科を専門的に研究している教師が減っていると聞く。小学校の研究会はほとんどが国語と算数の公開。社会科の公開授業研究会は本当に少なくなった。

2 社会科授業研究の現状と課題

社会科授業研究の衰退…。そこでは何が起き、どんな課題があるのかを考えてみる。

1 | 専門的な教師と一般の教師との乖離

社会科を専門とする教師と一般の教師との乖離がどんどん進んでいる。「専門の教師が行う研究授業」と「一般の教師が行う日常の授業」の差があまりにも大きいと感じてならない。

社会科授業研究の醍醐味は教材開発である。地域に題材を探し、丹念に調べ、教材として磨き上げる。この醍醐味を一度知ったら、社会科の虜になる。何を隠そう私もその一人である。

授業では、大人でさえ知らないような事実を前に、子どもが次々と立ち、活発に持論を述べ合う。自ら問題を発見し、見事な討論を繰り広げ問題解決する授業は、拍手喝采を浴びる。

しかし、教科書にも載っていないすごい教材で、こんな授業をできる教師は、ほんの一握りに過ぎない。一方で、一般の教師の日常の社会科授業は、教科書を音読させ、大事なところに線を引かせる程度で終わる授業も現実には多いのではないかな。

これほど大きな乖離がある教科が他にあるだろうか？

社会科は教材開発の余地が大きいだけに、違いが大きくなるのではないかな。社会科専門の教師が、努力すれば努力するほど、一般との乖離が進むという悲しい現実が少なからずあるのではないかな。社会科専門の教師にとってはつらい話だが、こうした現実から目を背けないことが大事だと思う。

2 | 教師の多忙化

現代の教師は本当に多忙である。校長として日々感じるのは、昔とは比較にならない非常にハードな日常である。

昔は、子どもの休み時間は、現実的には教師の休み時間でもあった。職員室に戻り、お茶を飲み、同時に教材談義にも花が咲いたものだ。

今は、安全確保の問題、個別のケアが必要な子どもへの対応などで、職員室に戻る時間が非常に少ない。放課後は、保護者とのこまめな連絡・相談、多くの事務処理などが待ち構えている。

本校は、ICTを大幅に導入するとともに業務フローも見直し、会議を極限まで減らすなど、徹底した効率化に努めているが、それでも、教師に

は余裕がないと感じることが多い。

私は、教科書に線を引かせて指導を終わる教師を責める気持ちには全くならない。

子育てや介護をしながらの教師も非常に多くなった。もちろん、私生活の忙しさを言い訳にできないのは当然だ。しかし、女性が子育てや介護に携わることが現実としてまだ多い状況で、女性の多い小学校という職場では、ぎりぎりの奮闘を続けている教師も多いことに留意したいと思う。

彼らの多くは極めて真面目な教師である。日々の授業に精一杯で、教材研究に十分な時間を割けないだけである。そして、「社会科の日常授業での教え方がわからない」だけなのではないだろうか。「理想的な社会科の研究授業」を目にすることはあっても、「現実的で学力の高まる社会科の日常授業」を見ることはほとんどない。「社会科はどう教えたらいのかかわからない」という声が聞こえるのも当然である。

3 | 全国学力・学習状況調査による国語・算数への関心の高まりと、社会科への関心の減退

全国学力・学習状況調査（以下、学力テスト）は2007年の導入以降、すでに5回実施された。国語と算数への関心が、保護者にも学校現場にもかつてなく高まっていることは疑いようがない。

学力テストを批判しているのではない。それは、完璧なものではないが、必要なものである。しかし、その副産物として、社会科への関心が相対的に薄れてきていることに危惧を覚えるのである。

世間では、国語・算数の学力危機の次に、「理科離れ」の話題が多い。学力テストの実施も決まった。しかし、世の中の急速なグローバル化、経済・財政の逼迫、民主主義の混迷…という課題山積のなかで、「社会科離れ」こそが最大の問題ではないだろうか。

簡単に結論を言えば、社会科も学力テストを実施すべきと思う。簡単なものでもよい、国民として必須の基本知識を問うことで、社会科への関心の減退を食い止め、まさに民主主義を支える学力の最低保障を行うべきである。

4 | 急速に進む世代交代

全国的に教師の大量退職と新規採用の拡大が続いているという。加えて、30歳代40歳代の指導

力の高い中堅教師は、非常に少ない。

かつては、どの学校にも社会科の名人がいた。社会科に限らず、様々な教科のエキスパートがいて、手とり足とり指導する体制が整っていた。今は、「国語と算数の指導はできるが、社会科はちょっと…」というベテランが多いのではないだろうか？教育実習でも社会科の指導を受け、実習授業を行ったという実習生は極めて少ないという。

社会科は本当に危機的な状況なのである。

3 社会科再興への道

社会科再興への道は必ずある。ここでは、ささやかな提案とすでに実施した取り組みを紹介したい。

1 | 社会科研究諸団体の活動を「日常授業の改善」というテーマにフォーカスする

まず、社会科研究諸団体が、一般の教師が行う日常授業の改善に資する具体的な提案を増やすことである。

つまり、地域の実情に合わせた教材開発や、変化の激しい時代に合わせた新たな教材開発をすると同時に、社会科の授業で困っている教師を支援することにも、努力を傾注すべきである。

もちろんこれまでの教材開発型の研究が創り上げた素晴らしい成果の山には、誇りを持つべきだ。教材開発はこれからも社会科の魂であり命である。地域に脈々と息づく「プロジェクトX」を発掘し、そこにかかわった人々の奮闘に光を当てる。これこそがthe社会科である。

しかし、それと同時に、努力の半分を、研究時間の半分を、一般の教師の日常授業の改善に向けるのである。

私の所属する北海道社会科教育連盟（以下、社連）では、二つの取り組みを始めている。

一つは「基礎基本セミナー」の開催である。これは主に札幌支部を中心に行っているが、徐々に全道各支部に広まりつつある。

このセミナーの特徴は、会員以外の教師にも案内をし、主に教科書を使った日常授業の進め方を研修することである。講演形式は極力避け、模擬授業で授業の進め方を実演したり、ワークショッ

ブ的な研修を行ったりしている。

この会で、社連の会員は、一般の参加者へのサービスに徹する。「社会科を好きになってほしい」「社会科ってこんなに簡単でおもしろいのです」ということを、必死に伝えるのである。

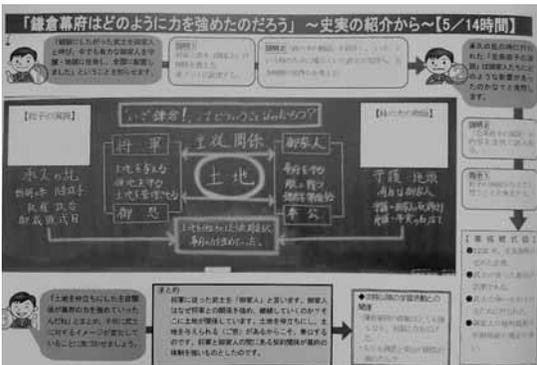
この取り組みを始めてすでに5年以上たつが、幸い好評を得て継続実施しているところである。

2 | 「板書型指導演」の開発

もう一つ、社連では、「板書型指導演」を開発・提供している。これは、社会科の授業が苦手な教師向けに、作成した冊子である。

社会科が苦手な先生の話を見ると、「板書のイメージがわからない」「発問が難しい」「教科書の利用の仕方がわからない」という声が多い。

つまり、授業イメージが持てないと言ってもいいだろう。そこで、この「板書型指導演」を開発し、次のような工夫を凝らした。



まず、授業最後にできあがる板書を、指導演の真ん中に写真で提示した。これが授業ゴールのイメージである。そして、その板書の周りに、主な発問を三つ程度配置した。その順番に発問するととりあえず、授業ができるという趣向である。

「板書型指導演」は、すでに6冊作成しているが、静かな人気を呼び、品切れになっているものもあるほどである。

(問い合わせ先：札幌市立あいの里西小学校

菅原隆司 電話 011-778-2130)

3 | ICTの活用 ～社会科再興の切り札～

平成 21 (2009) 年度のスクールニューディール政策をきっかけにして、普通教室での大型提示装置 (デジタルテレビ、プロジェクタ、電子黒板など) の常設が進み、パソコンや実物投影機の整

備も徐々に広がりを見せている。

本校では、すでに平成 20 (2008) 年度から、整備を開始。今では、全教室で毎日黒板と同じようにごく当たり前にデジタルテレビ (50 インチ) や実物投影機を活用している。

足かけ4年の活用を振り返ると、これらの機器を活用した「拡大提示」は、授業改善に絶大な効果があることを実感している。

社会科授業の核は、昔から資料の拡大提示である。大きな地図、掛け図は昭和 33 年生まれの子どもの時代にも重要な教具であった。

デジタルテレビや実物投影機が教室に常設されていれば、あらゆる教材を極めて簡単に拡大提示することができる。



特に教科書に掲載されている、選び抜かれた写真やデータなどの資料を気軽に拡大し、教室の全員で見ることができる効果は実に大きい。

さらに、子どもが持っているものと全く同じ写真、地図が拡大されるということには格別の意味がある。学習障害のある子どもにとっては、微妙な違いがわかりにくさにつながることもある。全く同じ物が拡大されることで、どの子にもわかりやすい授業が可能となるのである。

4 | 教科書のポテンシャルを引き出す ～教科書の時代が来る～

私は、「教科書の時代」が来るのではないかと考えている。

これまで挙げた、日常授業への着目、ICTの活用は、いずれも教科書を軸とした取り組みであることが大きなポイントである。

本校では、ICTの活用が進むにつれて、教科書を利用する頻度が非常に高まった。社会科の教科書には非常によく考えられた写真や資料が掲載されている。これを手軽に拡大提示できることで、

日常授業のクオリティは格段に改善される。

社会科指導の苦手の教師にとっても、子どもにとっても【見える】【わかる】授業が現実のものとなってきたのである。

写真などを拡大するようになると、それと文章の関係を考えるようになる。すると、教科書のどの文章も、一字一句、無駄なく写真やグラフなどとつながっていることが見えてくる。さらに、文章のちょっとした表現の違いに大きな意味があることもわかってくる。

つまり、【ICTでの教科書活用】が、【教科書そのものの活用】に進化していくのを感じる。

考えてみると、これまで、社会科教科書は不当に軽んじられてきてはいなかっただろうか。

「教科書を教えるのは論外、教科書で教えるのだ」と私も若いときから何度も指導を受けてきた。確かにその通りだ。しかし、我々は本当に教科書を使いこなすことができていたのだろうか？教科書を過度に軽んじるあまり、教科書のポテンシャルを引き出しきれていなかったのではないか。

社会科研究は、理想を追ってきた。高い天上の昴を追いつけ、教材開発に明け暮れてきたのである。しかし、我が国の教科用図書という地上の星の輝きに気がつかなかったのではないか。

さらに、デジタル教科書の登場は「教科書の時代」の象徴となる可能性を秘める。デジタル教科書はまだ登場したばかりだが、今後急速に研究は進み、より使いやすいものへと進化するであろう。

その進化の過程は、ぜひとも一般の教師にとってやさしいものであってほしい。社会科の専門家やICTに堪能な教師が魅力を感じるだけでは不十分である。

教育の情報化は、まずもって今まで苦勞してきた教師・子どもへの福音であってほしいと強く願う。情報化によって、教えやすく、わかりやすくなるのが最も重要なことである。

世代交代で、近年大量採用が続く若い教師たちは、本当に苦勞している。その教え子たちは、それ以上の苦勞であろう。今後、デジタル教科書には、こうした若手教師をサポートする可能性を期待できるかもしれない。

いずれにしても教科書のデジタル化は、教科書

そのものを見直すきっかけになるに違いない。「教科書の時代」は目の前に迫っている。我々は、社会科の現状を見据え、来るべき「教科書の時代」に備える必要があるだろう。

4 そして、真の高みへと

とはいえ、「教科書の時代」は、理想的な社会科授業が広まるための一里塚に過ぎない。

複雑な、そして変化の激しい現代社会。生き抜くために必要な情報はあふれ、刻々と姿を変える。そのなかで、教科書は、膨大な情報を効率よく子どもたちに学ばせる基本ツールとして見直される。それが「教科書の時代」である。

そのあとに、あるいはその上に、目指してきた真の社会科が近づいてくる。

こうした考え方にはご批判もあると思う。「教科書への依存を強めると、教え込みの社会科にもどるのではないか」「クリティカルシンキングできる子どもに育つのか」「参画する子どもになるのか」「体験的な学習が減るのではないか」等々、多くの意見がありそうである。

私は、どれも杞憂であると考えている。まず、ベーシックな部分を教科書でしっかり習得させることは、全ての子どもに効率的・効果的に基礎学力を保障することである。そうすることで、次の活用型の学習、思考力を鍛える学習にゆとりをもって臨めるようになるのではないか。

教育出版の『小学社会5上』p.86には、「森は海の恋人」が掲載されている。おなじみの素晴らしい教材だ。素晴らしい牡蠣を得るには、目の前の海ではなく、まず森を豊かにすることだ、と漁師の畠山さんは教える。

日本の子どもたちの社会科の学力が向上するには、社会科を専門とするリーダ者の奮闘だけでは足りない。先端的な授業開発だけでは、社会科学習の充実は臨めない。教育の源流に遡り、多くの仲間の教師たちとともに日常授業という森を豊かにしていかなければならないのではないか。

畠山さんの生き様は、我々にとってこそ極めて示唆的である。子どもに教えるだけでなく、我々自身が畠山さんの着眼に学ばなければならない。

教科書の使い方はどう変わりましたか？



—先生方へのアンケートより—

前頁までで紹介していただいたとおり、札幌市立山の手南小学校では、教科書を軸とした日常の授業改善に取り組んでいます。校内での研究・研修を通して、社会科教科書の活用についてどのように方法や考え方が変わったのか、山の手南小に在籍する若手の先生方／社会科専門でない先生方から、実際の声をお寄せいただきました。



【アンケートの凡例】

- 1 校内研究・研修を通して、社会科教科書の使い方・社会科教科書に対する意識はどのように変わったか
- 2 社会科授業の中で教科書を活用して、実際に手ごたえのあった経験
- 3 社会科教科書を使ううえで、特に気をつけていきたいこと
- 4 教員歴
- 5 研究教科（専門としている教科）



- 1 見開きで1時間、追究すべき課題をはっきりさせ、文章や挿入写真・資料を根拠として理解させるようにしました。
- 2 6年上p.43 竹崎季長の資料。
他の資料も使用しましたが、ご恩と奉公から幕府の衰退がよく理解できた。
p.88ペリー来航の絵、p.104風刺画、
p.128沖縄米軍上陸
(ICTで切り取って提示) 視覚にうったえた後、(思考) 調べることで追究が高まったと思います。
- 3 資料の提示の仕方やタイミング、獲得すべき知識。
- 4 11年目 5 国語科

- 1 以前は教科書を読んで語句を確認するという使い方でしたが、今はその意図を考えるようになりました。また、写真の配置や大きさについても考え、授業づくりの際に意識するようになりました。
- 2 4年生「わたしたちの北海道をひらいた人々」では、単元を構成する時に、教科書の語句や人物を小樽や廣井勇^{ひろいさみ}*に置き替えながら考えました。
- 3 資料の選び方、単元構成、発問を、教科書に合った内容ですすめていきたいです。
- 4 3年目 5 社会科

※小樽港の防波堤工事など、北海道の重要な港湾の整備に携わった人物。日本を代表する土木工学者。

1 以前はグラフや表などを深く読み取らせることが難しかったが、今は、意識して深く読み取らせることができるようになった。

2 6年下「憲法とわたしたちの暮らし」p.16
国民主権の意味や内容をおさえたあと、選挙の投票率のグラフを見せて考えさせた
→「国民の声を政治に反映させる大切な機会なのに、行かない人が30%もいる。なぜだろう。そして今後どうあるべきか（どうしていきたいか）」

3 本文だけでなく、絵やグラフなどの資料も大切に扱っていきたい。

4 3年目 5 国語科

1 意識としては

- 必要な情報は教科書にのっている
- 一文一文をさらっと読んでしまいがちだけど、「ということは?」「何を言いたいのかな?」ということを考えて読む
- なぜこの資料・この写真をのせているのか、教科書の意図をよむ
ようにできたらいいなと考えています。

2 全ての単元を通じて、ICT(実物投影機など)で資料や写真を大きくうつして全員で見られることは有効だと思いました。(見てほしいポイントを示しやすく、確実に全員に伝わるので)

4 2年目 5 国語科

1 以前は、独自で用意した写真や資料を使って授業をしていたが、今は、教科書の写真・資料を使って授業をするようになった。

以前は、写真や資料を作成する時は、自分の意図するアングルで撮影したり、資料を提示したりしていたが、今は教科書と同じアングルで撮影したり、資料を用意したりするようになった。

2 6年上「全国統一への動き」
p.52「信長の勢力の拡大」

→地図をプリントし、その上に勢力図を色ぬりし、年代別に提示することで、勢力の広がりがかめた

「二つの戦争と日本・アジア」p.114
「資料を生かしてポスターをつくる」

→1の資料を活用し、思考の力をみとることができた。

3 写真・資料に気をつけたい。
ページ内の写真・資料の大きさ／写真のアングル／図の意味 など

4 6年目 5 社会科

1 教科書と副読本を比べて活用するようになった。

[副読本]

[教科書]

札幌市の様子 → 横浜市との比較
スーパーマーケットの様子 } 見開きの絵
昔の道具をさがそう } 資料の活用

2 3・4年上p.33 地図を見て

交通と公共施設の関係

札幌も横浜も交通の便のよいところに公共の施設がある。

4 27年目 5 生活科

1 以前は主に資料(写真や図・絵)を中心にやっていたが、本文もていねいに読み、必要に応じて教科書とあわせて使うようになった。

2 教科書3・4年上の見開きイラスト(スーパーマーケットの絵、昔のくらしの絵)は、そこから子どもたちが色々気づけるポイントがちりばめられているので、とても活用できました。

3 地域副読本とうまく併用させて活用していきたいです。お互いのよい所を生かして・比較させて…など

4 1年目 5 算数科

1 以前は教科書の記述の細かいところまでよく読まずに授業していたが、短い記述の中にたくさんの意図が凝縮されていることを知り、よく読みこむようになった。
子どもたちに気づかせたい（着目させたい）記述を意識するようになった。
グラフや写真など資料がそのページにある意味を記述にてらしあわせて考えるようになった。

2 5年上「わたしたちのくらしと国土」p.22～39

（暖かい土地—寒い土地・高い土地—低い土地）

選択して学習することになっているのですが、選択したほうはしっかり読み解いて学習していき、もう一方は部分的に比較のための資料として使った。両方掲載されていて使い分けできてよかった。使いやすかった。

5年上「食料生産を支える人々」p.74～75

漁船の写真だけでなくまずイラストで資料提示していることで、教科書の叙述をもとに考えを深めていくことができた。イラストには、つかませたいポイントがしっかり入れられていて、とてもよかった。

3 資料の内容の意図、資料の種類、絞られた記述の意図など、隅々まで読み解きたい。
どの資料を使うとねらいにせまれるのかも吟味・取捨選択したい。

4 19年目 5 国語科

1 教科書を読む（声に出して読むだけでも）・線を引く・資料を見るなど、単元の中で少しでも活用するようになりました。以前は、地域副読本は利用しても、教科書は開かずに終わる単元もありましたが、イラスト、図、グラフなど、使えそうなところは活用するようにしています。3年生の内容としては、“札幌”ではなく“横浜”が取り上げられている教科書だと、すべてを教科書どおりに授業するのは難しいですが、「札幌と比べて…」 「札幌と同じで…」などの使い方ができることを教えてもらいました。

2 3・4年上「見直そうわたしたちの買い物」p.59

スーパーマーケットの売り場の様子イラスト

活動→売り場のイラストを見て、お店の工夫を見つける

- ・売り場の案内板
- ・おすすめ品のコーナー
- ・リサイクル回収BOX など…

「さぐってみよう昔のくらし」p.117

60年ぐらい前の農家のイラスト

活動→イラストを見て、今とちがうところを見つける

- ・井戸
- ・かまど
- ・いろり
- ・木でつくられているなど…

3 教科書と地域副読本の両方を活用して授業をつくっていく。
同じ流れで、というのは難しいので、“読む” “見る” など少しでも取り入れる。

4 5年目 5 理科

1 導入で写真を実物投影機に映し、気がついたことなどを交流している。円グラフや帯グラフの重要性に気がついた。グラフの活用、見せるタイミングなどに気をつけている。

2 5年下「生活環境を守る」p.38

1960年代の北九州の写真

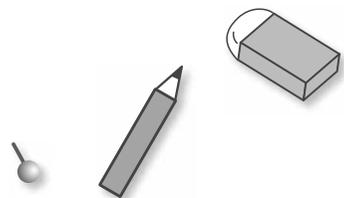
5年上

「わたしたちのくらしと国土」p.18

日本の気候の特色の図解

3 写真・グラフ等のデータを45分のどのタイミングで提示するかを考えていきたい。

4 1年目 5 理科



問題解決的な学習 = 問い → 思考 → 知識 —農家の仕事の工夫について考える『問い』の実践

観音寺市立観音寺南小学校 ではま だいすけ
出濱 大資

はじめに

「先生！私たちもこの種を植えてレタスを作ってみたいです！」授業後にある女の子が私のところへ相談にやってきました。「それは無理ですか？」懇願するような子どもに「じゃあ、みんなの意見も聞いてください。」と答えた。すると、いつもはおとなしい子が帰りの会で友だちと二人で提案した。「今日の社会の授業で扱った種を学級園で育てたいのですが、みんなはどう思いますか？」みんな大賛成だった。育てることを了承すると、「やったー！」と喜ぶ子どもたち。レタス農家の仕事に問いをもち、考え、答えを見つけていった子どもたちは、みんなレタスが大好きになっていたのである。

1 問題の所在

思考するってどんなこと？

学習指導要領の改訂で、思考・判断・表現の力が課題に挙げられた。多くの研究会や実践提案でも、中心課題になっている。しかし、「思考力・判断力・表現力」の研究を見ていくと、いかに思考・判断・表現させるか、といった方法論の研究になっている実践をよく目にする。内容教科である社会科の研究が方法論の研究に傾倒していくことには非常に疑問を感じる。原点に帰って見つめ直すと、「思考」とは、問いに始まり知識に終わるものではないだろうか。学力の3要素を「①学習意欲が喚起され、②課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を発揮し、③基礎的・基本的な知識・技能を習得していく」とまとめるとうわかりやすい。

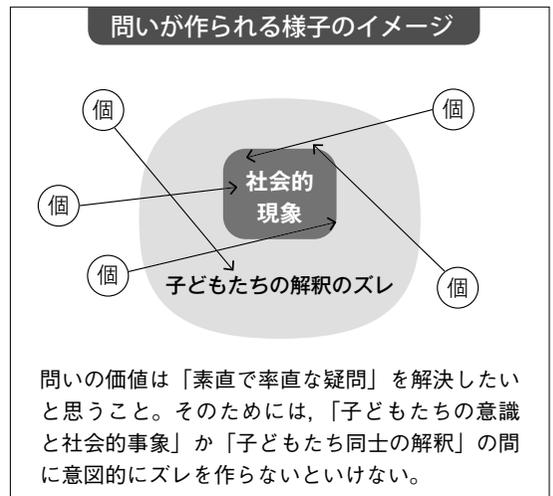
そこで重要なのは「問い」である。岩田一彦氏が述べているように、社会科の授業において問い

が重要な意味をもつのは、それによって学習過程が決定されるからである。同時に、問いによって子どもたちが習得する知識も変わってくるので、その意味はいっそう大きい。そのため、子どもたちの学びを主体的なものにするために我々教師が考えるべきことは、「授業の入口である問いをどのように設定すべきか」であろう。こうした問いを重要視しようとする流れは、国立教育政策研究所の出している『評価方法等の工夫改善のための参考資料（平成23年3月）』の中で、社会的な思考・判断・表現の評価場面として学習問題や予想・学習計画を考える場面が設定されていることから裏付けられる。

2 実践で大切にしたこと

子どもたちのエネルギーを引き出す問いとは？

まずはじめに、私自身が「問い」をどのように解釈しているかについて説明したい。問いの価値は、子どもたちが「素直で率直な疑問」をもつことによって主体的に調べ考えようとするところである。



子どもたちは、社会的事象を見るときに、それぞれ自分の知識・経験と照らし合わせながら理解しようとする。そのため、驚きや困惑を引き出す社会的事象を提示すると、「なぜこんなことが起こるのか？」というように、子どもの意識と教材の間にズレが起きる。

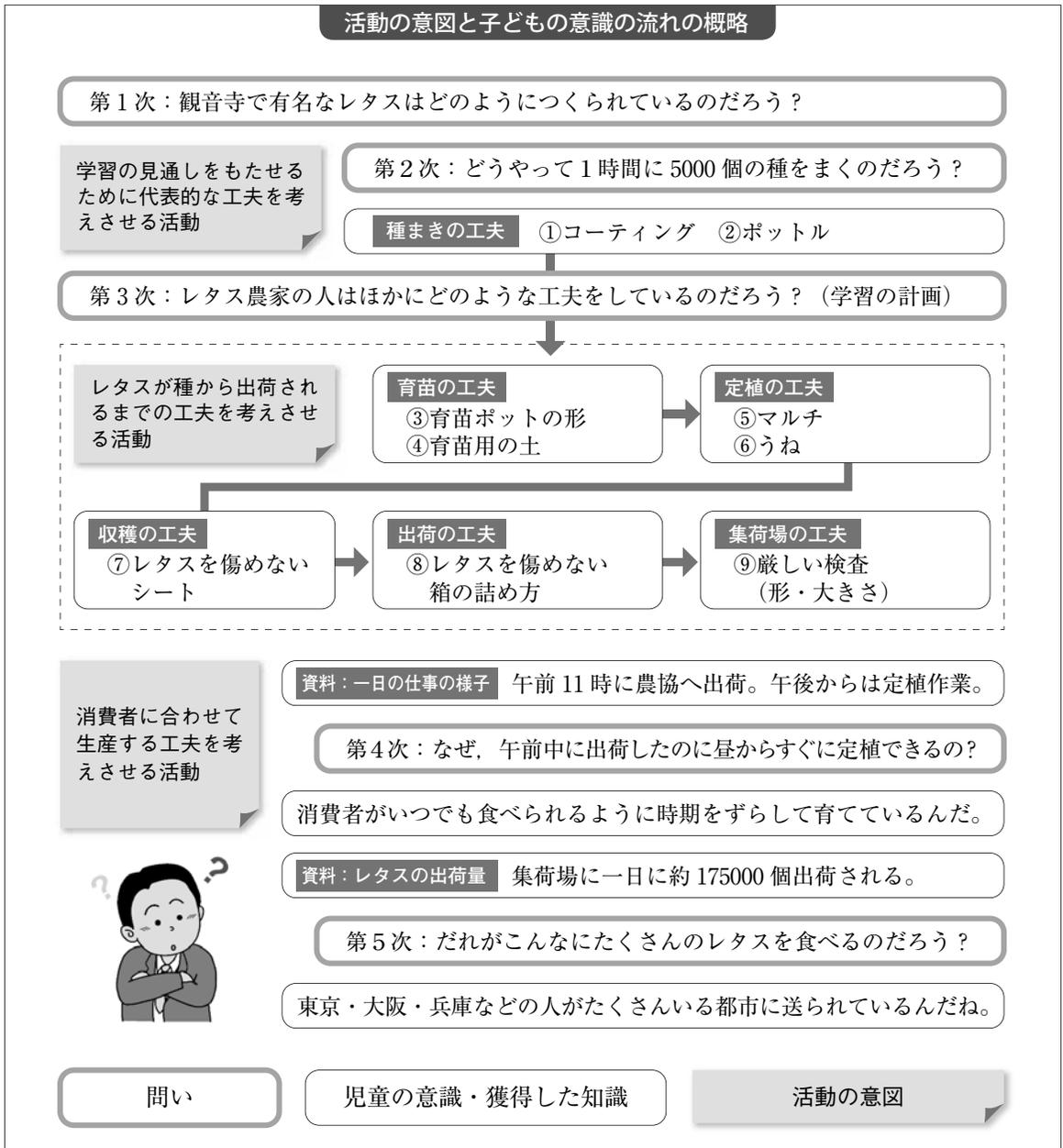
また、知識や経験の差によって理解度や認識に一人ひとり違いがあるので、子どもたち同士の解釈のズレが生じてくる。このズレの原因を突き止

めようとする「思い」がエネルギーとなって、問題解決へ向けて探究意欲を高めるのである。さらに、ズレの原因を突き止めようとする学習活動は、中心にある社会的事象や、それを見る友だちのもの見方や考え方の理解に行き着いていく。

3 単元で見える問い

問いを接着剤に前時と本時と次時はつながっている

ここで一つ考えていただきたい。「観音寺市で



作られたレタスは、どうやって大阪の市場まで運ばれているのだろうか？」という問いと、「(観音寺市だけでは絶対に食べきれない) あれだけたくさんレタスを誰が食べているのだろうか？」という問いでは、どちらが良い問いだろうか。(ちなみに前時では、「時期をずらしながら多くのレタスを作っている」ことを学んできた。)

この二つは、両方とも運輸と市場の働きを考える学習活動につながるものであるが、私は圧倒的に後者の問いが良いと考える。後者は、子どもの意識に沿った学習の流れから問いが生まれているからだ。このように、単元を通して子どもたちの意識が流れる問いができるように単元構成を考えた。紙面の都合上、ここでは概略だけ述べる。

本単元では、第1次で、地図を使って市の農産物の分布を学ぶ。その中から農家を選んで仕事の様子を学んでいこうと伝えると、子どもたちはレタスに着目した。観音寺市はレタス栽培が盛んで、大手ハンバーガーチェーンでも扱われている「らりるれレタス」というブランドがあるからだ。第2次では農家の種まきの工夫を学んだ。この工夫を足がかりとして単元の計画を立てていく。

その後の活動では、大きく2種類の工夫を学ぶ。

前半部分では、レタスの種が定植・収穫・出荷されていく様子を学び、それぞれの作業過程での工夫を学んでいく。例えば、定植では畑に畝を作り、マルチをかぶせることで、草取りの作業を楽にしたり、肥料が流れないようにしたりすることを学んだ。また、収穫の際には、レタスの切り口から出る「ちち」(白い液体)がレタスを傷めることを知り、それを防ぐためにレタスフレッシュキーパー(レタスを傷めない薬品を含ませているシート)を切り口に貼ることを学んだ。これらは、レタスが種から出荷されるまでの工夫を考える活動といえる。

後半部分の活動は、消費者のニーズに合わせて生産・出荷するための工夫を学んでいく活動である。資料「一日の仕事の様子」を提示し、午前中に出荷作業を行い、午後から定植作業をする日があることを伝える。このときの子どもたちの反応が実におもしろかった。子どもたちは、同じ日に定植して出荷することは物理的に無理だと真剣に考え

ていた。稲作のイメージでレタス栽培を考えているため、何枚も畑を使って時期をずらして育苗・定植しているとは考えもしなかったのだ。こういった子どもの意識と事実とのズレは、驚きと困惑を引き出す問いにつながる。その後、レタスの出荷量を提示し、どこで消費されているかを考えさせながら、運輸の働きにつなげていった。

4 単元構成のポイント

導入部分で一気につかむ

単元づくりで、問いを高めるために重視したことは、導入部分で子どもの気持ちを一気につかむことである。「農家の工夫を調べよう!」といっても、子どもたちに知識がまったくない状態では、モチベーションが高まらない。そこで、学習計画を立てる前段階で、「とっておきの仕事」を学んだ。

その仕事とは、ポットルという道具を使ってする種まきである。平成元年にこの道具が取り入れられる以前は、畑に直に種をまき、出てきた芽を一つずつポットに移し替えて育苗をしていた。これが、ポットル・コーティング種子を導入することで、レタスの種を1時間に5000個以上まき、そのままプラグポットで育苗することが可能になったのである。この種まき作業を体験した子どもたちは、感動と驚きとともに、「ほかにももつ

導入部分の意図と概略

農家の仕事の工夫 1

農家の仕事のすごさを実感し、学習への期待を高める。仕事の概要を知り、学習の見通しの一助とする。

各自による雑多な調べ(家庭学習)

「ポットル」のように工夫をしていることを調べ、学習の計画を立てる素材を集める。

学習の計画

調べてきたことを作業ごとに分類し、学習の計画を立てる。

農家の仕事の工夫 2

調べてきたことの意味づけ価値づけを行う。

と工夫があるのではないか。どんな工夫があるのだろう？」という期待感を高め、学ぶ意欲を高める。その際にレタスが出荷されるまでの過程を教えることで、工夫を調べていく見通しを立てることができる。

このようにして、学習の計画を立てるのに必要な子どもたちの思いや知識を高めるようにした。

5 本時の問い

子どもの意識と社会的事象とのズレから問いをつくる

次に、本時の問いについて説明したい。本時の問いは、具体的でなければいけない。そうでなければ子どもたちが考える足場を失うからだ。今回取り上げたのは、コーティング種子である。レタス農家が扱う種はコーティングされており、発芽率が高まったり、種が扱いやすくなったりする。また、コーティングすることで、大量に種まきができるポットルという道具の導入が可能になった。このコーティング種子を使って、「どうして種をコーティングしているのだろう？」から「農家の人はどうやって1時間に5000個の種をまくのだろう？」へと2段階の問いを作った。

子どもたちに見せたのは、「市販の種」と「農家の人が使っている種」である。この二つは形状が違うので、子どもたちは違う種を使っていると思い込む。そこで、「農家の種」をつぶさしてみると、中から出てくるのは市販の種と同じものである。そのときに初めて、農家の人の種にはコーティングがされているのだと気づき、「なぜ、種のまわりをコーティングするのだろう？」という問いが生まれた。

この問いを検証するために擬似体験を行った。製氷皿を育苗ポットに見立て、種を一つずつ入れていく。すると、普通の種とコーティング種子では明らかに扱いやすさが違う。素早く種がまけるし、間違っていたときも簡単に取り出せることがわかる。コーティングの良さに気づいた子どもたちは、「これなら1時間に200個くらいまけるぞ！すごい工夫だ！」という思いをもつ。そこで、「農家の石川さんは1時間に5000個の種をまくことができる」という事実を伝え、子どもたちは「えー！なんでそんなにたくさんまくことがで

きるの？」と驚く。そこへ、「5000個まくにはある秘密があるんだよ。」と伝える。その瞬間子どもたちの思考が始まる。「種を短時間にたくさんまくにはどうすればいいんだろう？」と。「社会的事象（農家の石川さんは1時間に5000個の種をまく）」と「子どもたちの意識（自分たちは1時間に200個くらいまくことができる）」との間にあるズレが、「石川さんはどうやって1時間に5000個の種をまくのだろう？」という問いを生んだのである。ちなみにこの答えは、「一度に128個の種がまける『ポットル』という道具を使っている」である。

6 実践から見えてきたこと

問いを作るときに意識したいこと

「驚きや困惑をもって生まれた問い」は、子どもの課題意識を高め学習意欲を高める。その際に、いくつか問いの条件のようなものも見えてきた。その一つが具体性である。「工夫」や「努力」「ひみつ」などといった抽象度の高い言葉では、子どもたちが自分の言葉で語れる問いが生まれない。問いは、具体的なものから生み出されることが大切だ。問いが具体的だと「5000個種をまく工夫は？➡ポットルという専用の道具」というように必ず答えが明白なものになっていく。このように、具体から抽象へと高めていくことが子どもの学びにとって自然だと感じた。さらに、中学年の社会科では、実物を見て・触って・匂いをかぎながら問いを作ることが、思考を促すためにも重要だと再確認できた。

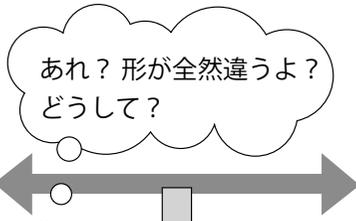
「先生、社会って難しいけど、面白いな！」と笑顔で語ってくれた子どもがいた。これが子どもの思考を物語っている。

あれから3か月。レタスの収穫の時が来た。ナイフでレタスを切り取る。切り口から「ちち」が出てくるのを見て、「いかんわ。先生。これではレタスが傷む！」「レタスフレッシュキーパーないん？」と、子どもたちが口々に言う。問いをもって主体的に学んだ知識は子どもたちの中に息づいている。

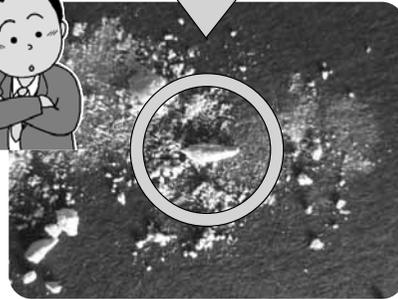
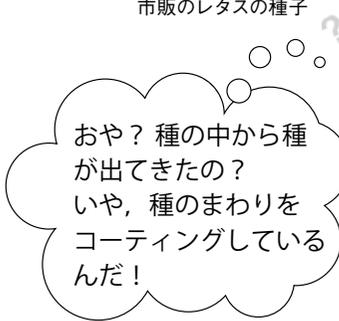
問いが生まれていった過程



市販のレタスの種子



農家が使っているコーティング種子



コーティング種子をつぶしてみると
中からレタスの種が出てくる。

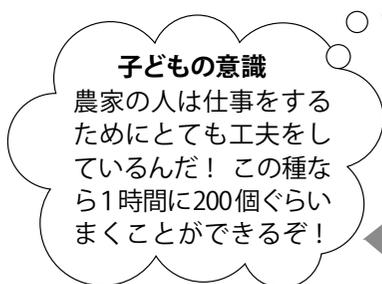
問い「なぜ、種のまわりをコーティングしているのだろう？」

検証：普通の種子とコーティング種子で種まきの擬似体験を行う。

検証方法：製氷皿に一つずつ種を入れていく。

わかったこと：コーティング種子は種がたくさん入ってしまってもすぐに製氷皿から取り出せる。しかし、普通の種は1つだけ取り出すのは難しい。コーティング種子は手につかないので種をまきやすい。

コーティング種子は種をまくときに取り扱いやすい。これが農家の人の工夫だ！



事実

レタス農家の石川さんは1時間に5000個の種をまくことができる。

問い「石川さんはどうやって1時間に5000個もの種をまくのだろうか？」

◆ 平成 24 年度用の教科書は、平成 23 年度用の教科書と下記の箇所が変更されております。ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

【小学社会 5上】

ページ	行	平成 23 年度用	平成 24 年度用
p.18	6	夏から秋には南東から	夏から秋には、南から
p.26	囲み	最近では、すべてを手で取り取るのではなく、花と根だけをなたとかまで切って出荷する方法が増えています。	最近では、余分なものをすべてを手作業で取り取らずに、花と根だけをなたとかまで切り、葉などはついたまま出荷する方法が増えています。
p.40	地図	マウント・オーガスタス (オーストラリア 2228m)	マウント・オーガスタス (オーストラリア 1105m)
p.56	グラフ②		(1年ごとの数値を示すグラフに変更)
p.65	囲み	害虫を退治するハチを利用する	害虫を退治する天敵の虫を利用する
p.82	脚注		教科書82～87ページでは、岩手県宮古市と宮城県気仙沼市の漁業を取り上げています。2011(平成23)年3月11日に起きた東日本大震災では、これらの漁師の方々も大きな被害を受けましたが、より質の高い水産物を消費者にと届けたいというこれまでどおりの願いのもと、復興への取り組みを進めています。
p.130	地図		(一部の色を修正)
p.138	グラフ		(化学工業, 食料品工業, 金属工業の順位を修正)
p.156	10	単位で表わした考え方も	単位で表した考え方も

※印の箇所につきましては、「まなびと 2011年秋号」でも詳しい通知を掲載しております。

【小学社会 6上】

ページ	行	平成 23 年度用	平成 24 年度用
p.44	2～3	14世紀に入ると、足利氏が、京都の室町に新しく幕府を開きました。	14世紀に入ると、足利氏が、京都に新しく幕府を開きました。この幕府を室町幕府といいます。
p.47	囲み見出し	祇園祭と町衆	祇園祭と町衆
p.64～65	6～3	徳川家康の死後、2代将軍の秀忠は、武家諸法度というきまりを定めて、これにそむいた大名は、ほかの領地に移したり、領地を取り上げたりしました。また、江戸城の修理や、河川の堤防づくりなどの土木工事にも、資金や人手を出すように命じました。3代将軍の家光は、	また、幕府は、武家諸法度というきまりを定めて、これにそむいた大名は、ほかの領地に移したり、領地を取り上げたりしました。江戸城の修理や、河川の堤防づくりなどの土木工事にも、資金や人手を出すように命じました。3代将軍の家光は、
p.135	6	アメリカで開かれた平和会議で、	アメリカで開かれた講和会議で、
p.149	年表		●東日本大震災が起きる (二〇一一)

◆ 教科書の以下の箇所につきましては、下記の通りご訂正の上ご指導くださいますようお願い申し上げます。

【小学社会 3・4下】

ページ	行	誤	正
p.26	図	救助工作車	救助工作車
p.55	図	布類	衣類

◆ 弊社ウェブサイトでは、東日本大震災の発生を受けて、『小学社会5上』で紹介している養殖・栽培漁業の内容を補足してご指導いただくための補助資料を掲載しております。子どもの関心や問題意識のあり方にそくして、資料の中から適宜内容を選んだり要約したりして読み聞かせるなど、ご活用いただければ幸いです。

『小学社会5上』「2 育てる漁業にはげむ人々」補助資料

- 教育出版トップページ URL ●

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

☐ トップページから、「小学校のサイト」⇒「社会」⇒「指導資料」と進んでください。

かきの養殖漁業 高山 重篤さん（宮城県気仙沼市）

【教科書5上 p. 86～87】



■ 高の半分まで海底が見えた

3月11日の昼過ぎ、かきやほたての出荷作業が一段落した高山さんは、港の作業場の2階にある部屋で調べものをしていました。すると、大きな揺れに襲われ、しばらくして大津波警報が聞こえてきた。1960（昭和35）年のチリ地震津波を経験していた高山さんは、今回もそれと同じくらい大きな津波が来るだろうと考え、作業場が床下浸水となった当時のことを思い出しながら、とりあえず機械類などを少し高い所へ上げた。また、地震のため出荷が間に合わなかった2000個のかきを詰めたパレットを、港を見下ろす高台にある自宅まで運んでおいた。

自宅から海の様子を見てみると、地震からおよそ30分後、潮が引き始め、その後、まるで風呂に湯がどんどんたまるように津波が押し寄せてきた。その次の引き波では、港の半分まで海底が見えた。さらに高い津波が港を襲った。先ほどまでの作業場も、その波にすべてのみ込まれた。危険を感じた高山さんは、孫を抱えて自宅裏の山に駆け上がった。

ほかの住民と山の上で合流し、そこで夕方過ぎまで待機したあと自宅に戻ると、幸いにも家は浸水してはなかった。だが、港から家のある高台へと通じる坂道のほとんどもに浸水した跡があり、道路脇の木々には池に使っていたロープや浮き玉が絡まっていた。こんな高台にまで津波が押し寄せたのかと思うと、ぞつとした。

■ 木々を拾い、かきを食べ

翌朝、港の様子を見渡すと、何の海沿いでも暮らす以上、津波の被害像が想像してはなかった。外部へとつながった。夕方になってようやく潮のままだった。

地震後は寒い日が続く。暖をとるため、水の確保も必要だったので、これらの作業だけで一日が終りがかった。「あんな状況で、家賃はないでしょうか」と高山さんは

■ 今年も開かれた植樹祭

高山さんは、水産資源を守る「人」を合言葉に、地元の漁師や漁師20年以上前から続けている。震災

さけの栽培漁業 萬 直紀さん（岩手県宮古市）
【教科書5上 p. 84】

■ 一刻も早く、ふ化へ

地震が起きた3月11日14時46分、萬さんはふ化場のある宮古市津軽石にはおらず、盛岡市で開かれた県漁連の会議に参加していた。会議室は建物の5階だったのが、立ていられないほどの揺れだった。その瞬間、頭に乗かんだのはさけのことだった。当時、飼育池には多くの稚魚がいたからだ。

飼育池では、井戸水を電動のポンプでくみ上げて、かけ流し（くみ上げた水を循環させることなく流すこと）で稚魚を飼育している。停電になれば、自動発電機が回る仕組みになっているものの、その燃料は8時間しかもたない。電力が復旧しない場合、8時間以内に稚魚をすべて放流しなければ、井戸水をくみ上げられなくなって死んでしまう。

そうはいっても、「津波がふ化場まで来るとは思っていなかった」。今までの停電はせいぜい1時間、どんなに長くても一晩たてば復旧していた。しかし、状況がわからない以上、とにかく現場に居なければいけない。



津波を聞いていたが、電気が悪いために途切れてしまっていた状況が、うしろ手でたどり着いたが、あたりを見て驚いた。状況は、萬さん

三陸の自然とこれからも生きる ～震災から復興への日々～

わかめ・こんぶの養殖漁業 佐々木 正勇さん（岩手県宮古市）
【教科書5上 p. 82～83】



■ 津波は堤防を越えて

最初に大きく地が揺れたときは、佐々木さんは高台にある自宅にいた。しばらくその場でじっとしていたが、揺れがおさまるとすぐに家を飛び出した。港の様子を見に行くためだ。「私は元消防員で、現在も防災クラブの活動を行っている。災害が発生した際には、避難する人を誘導したり、安否の確認を行ったりしなければならなかった」という佐々木さんの自宅から港までは、車に乗ればはるの先だ。

港の近くに住んでいる以上、津波のことは常に頭にある。佐々木さんの住んでいる岩手県宮古市の重茂には、いくつかの集落があり、そのうちのひとつが港からほど近い場所にあった。その集落に被害が及ばないかを心配したが、10年ほど前に新しい堤防が完成してからそれまでに、津波が到達することはない。

遠い昔、その集落まで津波が到来したことはあり、その後しばらくの間は海の近くに人が住むことはなかった。だが、それから時間がたつともにも再び家が建ち始めて、やがて集落になっていった。さらに、新しい堤防ができたことも手伝って、安心していた人は多かったといえる。

しかし、今回の地震では津波警報が発令されており、地震の大きさからいっても安心はできない。「地震から津波到着までは25分くらいの間があったように思う。3メートルくらいの津波かと思っていたが、実際はそれどころではなかった」。

佐々木さんが初めて確認することのできた津波の高さは4～5メートルで、この津波によって大小合わせて300艘以上の船が埋れていた。

「その後、起こった波が一番大きくて、堤防を越えて陸地に入ってきた。まるで映画を観ているみたいだったよ」。

地域の消防団によって水門が閉められたあと、佐々木さんたちは山を登って、高台から状況を見ていた。すると、「神に白い波が見えて、それがだんだん大きくなって崖にやぶて来た」。

あまりの大きさに呆然とした佐々木さんは、ただ津波を見ることができなかったという。状況のみ込んでからは、すぐに安否確認が始まったが、地区の住民全員の安否が確認できたのは翌日の夕方だった。

消防団や防災クラブの活動によって、ほとんどの住民が避難できたが、中には家の中で寝ていた人もいて、数名は助からなかった。港のそばにあった20戸の家はすべて潰され、車も津波にのまれた。

だった。その思いに家や船が浮いていた」と萬さんは語る。高

達まわっていて、「二階建ての事務所が島のように見えた」。津波は津

池にあった船や建っていた家を押し流していた。たは、「ふ化場と働く仲間、全員避難できたのか」ということ

が、幸いにも、働いていた4人はみな助かっていて、3～4日たっ

つかなかったことが、津波で家が壊れているのを見て危険を感じた4

人が助かったという。本人たちは無事だったものの、彼らの車

は、幸いにも、働いていた4人はみな助かっていて、3～4日たっ

つかなかったことが、津波で家が壊れているのを見て危険を感じた4

人が助かったという。本人たちは無事だったものの、彼らの車

は、幸いにも、働いていた4人はみな助かっていて、3～4日たっ

つかなかったことが、津波で家が壊れているのを見て危険を感じた4

人が助かったという。本人たちは無事だったものの、彼らの車

は、幸いにも、働いていた4人はみな助かっていて、3～4日たっ

つかなかったことが、津波で家が壊れているのを見て危険を感じた4



第10回 地球となかよし メッセージ

作品募集(2012年度)

おかげさまで、本企画は第10回を迎えることができました。
これまでご参加、ご協力いただいたみなさまに御礼申し上げます。
今年も、小・中学生からの素敵な作品をお待ちしております。

応募期間 2012年7月1日～9月30日
詳細は、ホームページをご覧ください。

第9回
入選作品



私の家の暑さ対策

最近、地球温暖化で、
夏の暑い日がとても多く感じられました。
でも私のうちは、大丈夫!!
日が当たっている所には、すだれをして、
暑い夏もすずしくなります。
風が入ってくると、日かげになっているので
とてもすずしいです。
これで、暑い夏も乗りきれ!!

- 主催 / 教育出版 ●協賛 / 日本環境教育学会
 - 後援 / 環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
- *協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。



届け、
ぼくらの
メッセージ!

ぼくたちの
言葉が合唱曲
になった!!

東日本大震災 復興への願いを込めて
音楽のおくりもの vol.1

子どもたちの詩によるエール

みんなはひとつ



昨夏、教育出版では、被災された児童生徒の心の支えになることを願い、全国の子どもたちから応援や励ましのメッセージを募集いたしました。

そして、この春、それらの子どもたちからのメッセージの言葉を歌詞とした合唱曲を作成いたしました。

この楽曲が広く永く愛唱され、多くの人の心に響き渡ることを願っています。

- 楽譜、歌詞の外国語訳(英語、中国語、韓国語、ポルトガル語)付 16ページ
 - CD1枚(ピアノ伴奏付)
 - テキスト構成・作曲 新実徳英
 - 演奏 NHK 東京児童合唱団
 - 定価 1,260円(本体1,200+税)
- *このピースの収益は、震災復興のための寄付とさせていただきます。

お問い合わせ

「地球となかよしメッセージ」事務局

Tel 03-3238-6862 Fax 03-3238-6887
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

小学社会通信 まなびと [2012年 春号] 2012年3月30日 発行

編集：教育出版株式会社編集局
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光
発行所：教育出版株式会社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒810-0001 福岡市中央区天神2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F
TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411